石川県立美術館だより

BIJUTSUKAN DAYORI

第405号　平成29年7月1日発行

特別陳列 前田家の名宝Ⅰ

特別陳列 北陸ゆかりの画聖Ⅰ

国宝　《万葉集（金沢万葉）》　前田育徳会蔵「前田家の名宝Ⅰ」より

重文　長谷川等伯（信春）
《日蓮聖人像》　大法寺蔵
「北陸ゆかりの画聖Ⅰ」より

夏休み親子で楽しむ美術館

アートdeまんぷく

脇田和 ―かくれんぼ―

石川のやきもの　青と赤

浅井忠《農夫とカラス》「アート de まんぷく」より

- バスツアー報告
- 7月前半の展覧会
- 7月の行事予定
- アラカルト　ただいま展示中

特別陳列

北陸ゆかりの画聖Ⅰ

7月13日（木）～8月27日（日）　会期中無休

北陸地方は、古代から大陸との交流拠点として独自の文化が発達しました。そして北陸と、京都や江戸との距離は、十六世紀後半以降独創的な画家が活躍する重要な背景でした。特に江戸時代は、外様大名の筆頭として、朝廷と幕府との権力構造のなかで文化によって主体性を保持する政策を打ち出した加賀藩の文化的求心力が、画家の動向に大きな影響を与えます。

今回の特別陳列では、長谷川等伯と久蔵、左近の等伯父子の作品と、狩野探幽門下の逸材として技量を高く評価されながら、後年探幽の門を離れた久隅守景の作品がまず注目されます。今回、高岡大法寺と高岡市美術館のご高配により公開が実現した長谷川等伯（信春）筆の重要文化財《日蓮聖人像》（八月四日まで展示）と同《三十番神像》（八月五日から展示）は、いずれも等伯が七尾を拠点に信春と号していた一五六四年と一五六六年の作です。子細に画面を観察すると、二十代半ばで等伯は絵仏師として熟達しており、若年時から様々な仏画の学習と制作にあたる環境にあったことがわかります。そして、伝長谷川久蔵筆とされている《祇園会図》（県文）の人物描写には、同じような血脈が感じられるのも興味深いところです。また大乗寺に伝来した長谷川左近筆《十六羅漢図》（県文）も、等伯一門の活動状況を知る貴重な作例といえます。

また、久隅守景の《四季耕作図》（重文）は、北陸の地政学的特質から改めて読み解いてみたい作品です。

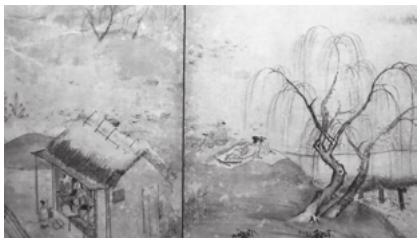
重文　長谷川等伯（信春）《三十番神像》大法寺蔵

第2展示室

学芸員の眼

今回は、最初に俵屋宗達筆と伝えられる《童子の図》を展示します。宗達の画風に等伯の影響が認められることは指摘されてきましたが、近年の調査は、この両者が法華宗のネットワークで強固に結びついていることを明らかにしました。詳細は、土曜講座でお話ししたいと思います。そして今回は、岩佐又兵衛筆と伝えられる《源氏物語図》（県文）も展示します。京都で力量が認められていた又兵衛が、福井藩の招きで二十年にわたって制作を行った背景にも、北陸の地政学的な特質があるようです。

今回は、さらに宗達の後継者・宗雪の《群鶴図》（県文）も展示します。等伯と宗達、又兵衛は実際に接触した可能性は極めて高いと言えます。そして作品を実見すると、守景と宗雪、又兵衛あるいはその一門にも接点があったと考えたくなります。



重文　久隅守景《四季耕作図》（部分）

第6展示室

夏休み 親子で楽しむ美術館

アート de まんぷく

7月13日(木)～8月27日(日)　会期中無休

夏休みの期間に合わせて開催し、どなたにでも気軽に作品鑑賞の楽しさを味わって頂くことができる展示「夏休み 親子で楽しむ美術館」。今年は、私たちが生きていくには、なくてはならないものであり、子どもから大人まで日々の楽しみのひとつでもある「食べ物」がテーマです。

絵や彫刻など美術は、自分たちの生活を守る呪術的な意図からはじまったと考えられ、人類最古の絵画といわれる洞窟壁画にも狩りを意識した食べ物である動物が描かれています。日常生活で食と美術の関係を意識することはあまりないかもしれませんが、生きることと深く結びついた食にまつわる作品は、このように美術史のはじまりから見られます。そして、時代や国が違えど美術の長い歴史をたどると、食をテーマとした作品は様々な形で数多く存在します。食事はごくありふれた日常のことですが、そこには喜びや希望だけでなく、絶望や葛藤などの様々な問題も潜んでおり、生にかかわる重要な関心事である食をめぐって、多様な文化が作られてきました。

本展では、当館所蔵の作品の中から、食べ物の姿を表す作品では、版画作品を含めた絵画の他、陶芸や漆芸などの工芸作品も集めました。「いただきまーす」と食事をしている場面の作品はもちろんのこと、食材のルーツに思いを馳せ、田畑を耕して種をまくなどの栽培やその収穫をテーマにした作品。また、食材を求めての買い物や調理の様子も展示します。私たちと食の関わりを表したこれらの作品の鑑賞を通して、美術が日常にあることを少しでも感じ取っていただければ幸いです。

この夏、この展示室レストランで、あなたの心をアートdeまんぷくにしにきてください。

脇田和《西瓜と貝殻》

森一正《色絵朝露飾皿》

学芸員の眼

毎年、「夏休み 親子で楽しむ美術館」の展示を、私たち学芸員のご案内で鑑賞していただくキッズ・プログラムを開催しています。今年は「アートdeまんぷく すきなたべものなあに?」と題して、展示室鑑賞の他、ご参加のみなさんには、ガラスに貼ることができるカラーシートで自分の好きな食べ物を制作をしていただく予定です。作品は二階コレクション展示室受付前のロビー、広坂別館の屋根が見える大きなガラスの壁面に、「アートdeまんぷく」の展示期間内ずっと掲示予定です。色鮮やかな光を通すカラーシートのおいしそうな作品は、夏休みの美術館の雰囲気をぐっと明るく楽しい雰囲気にしてくれることでしょう。日時は七月十六日(日)午後一時三十分から三時まで。申し込み不要ですが、ご参加の方ははさみをご持参下さい。たくさんの方々のご参加をお待ちしております。

前田育徳会尊経閣文庫分館
特別陳列
前田家の名宝Ⅰ

7月13日(木)～8月27日(日)　会期中無休

今回から二期にわたって、前田家の名宝を国宝《万葉集(金沢万葉)》と、国宝《土佐日記》を中心に紹介します。展示の名称に「加賀藩」がないのは、Ⅰ期で紹介する重文《馬郎婦観音像》を入手したのが加賀藩主ではなく、前田家十六代利為だったことによります。この作品は、加賀藩五代藩主・前田綱紀の文化政策に深く共感し、財団の設立など新しい時代にふさわしい形で藩主の思いを具体化した利為が収集した美術品の中でも注目されるものの一つです。観世音菩薩が美女に変化し、『法華経』をよく読誦する者に嫁すると条件を付け、馬氏の息子がそれを満たしたという中国・唐時代の説話をもとに、たおやかな女性像として描かれており、その点が筆者を李龍眠と伝えるゆえんと考えられます。

今回の白眉といえる国宝《万葉集(金沢万葉)》は、流麗な筆跡と華麗な料紙とともに、王朝文化の粋を良く伝える名品として高く評価されてきました。加賀藩主・前田家に伝来したことから、「金沢万葉」と呼ばれています。前田家には当初巻第三、巻第六の断簡の他に巻第二、巻第四も所蔵されており、これらを一帖に装幀したものが一九一〇年、明治天皇の東京・本郷の前田邸行幸の際に献上されました。本作は、この献上を記念して手許に残した巻第三の断簡二紙と巻第六の断簡五紙を一帖としたものです。料紙の文様の中には、《三十六人家集》(国宝、西本願寺蔵)などと共通するものもあることから、制作年代は平安時代末、十二世紀と考えることができます。

重文　伝李龍眠《馬郎婦観音像》　前田育徳会蔵

第4展示室
脇田　和
―かくれんぼ―

7月13日(木)～8月27日(日)　会期中無休

当館は平成二十七年度に(一財)脇田美術館より三一七点の脇田和作品の寄贈を受け、現在三二一点の脇田作品を収蔵しています。平成三年に脇田和が軽井沢に美術館を建てる際に厳選した作品とそれ以降の代表作を主体とする、油彩一五四点、水彩素描七二点、版画九五点の一大コレクションです。毎年これらの作品の中からテーマに基づいた特集展示を行いますが、今回は「かくれんぼ」と題して、子供や窓をモチーフとした作品をご覧いただきます。

脇田の作品は鳥や子供がほのぼのと描かれ、童話の世界をうかがわせますが、一方何が描かれているのか判然としないという声を聞くこともあります。初めドイツでデッサンを学んだ脇田の作品は、厳格な線と形を見せていました。しかし、戦後、形体は簡略化され、記号化された人物や鳥、草花が、ぼかしを伴う淡く美しい色彩で描かれるようになっていきました。

今回展示する《裏町の居酒屋》では茶褐色の画面に大きな四角が描かれ、その中に酒瓶やグラスや電球が描かれ、人間らしき人型がうっすらと見えますし、《二組の家族》では大小の矩形で細かく画面を区切り、それぞれに顔などが描かれます。茫洋とした中に喜怒哀楽が込められる脇田作品は、中に入り込み、探しものをするような楽しみに満ちています。

脇田和　《裏町の居酒屋》

第5展示室［工芸］

石川のやきもの

青と赤

7月13日（木）～8月27日（日）　会期中無休

青のやきものというと、何が思い当たるでしょうか。例えば中国で古くから焼かれている、透明感のある釉薬が美しい青磁、白地に藍で模様を描いた染付、あるいは古九谷の青手など。さまざまな技法を用いて、緑色や藍など多様な「青」を表現しています。そして赤いやきものはどうでしょう。赤楽茶碗の味わい深い色合いや、備前焼の火襷に見られる、素地自体の色を引き出す表現、そして江戸時代後期に再興九谷の民山窯や宮本屋窯で焼かれた赤絵の細密描写や、金彩を加えた赤絵金襴手の作品などが作られました。これらの作品はその美しさに魅せられた人々によって大切に伝えられ、素材や技法を研究して新たな作品が作られています。

今回の第五展示室では、明治時代から現代における石川県にゆかりのある陶芸作家たちの、多様な青と赤の表現をご覧いただきます。青のパートでは、中国の名品に倣った、初代諏訪素山《飛青磁茶碗》と三代井上良斎《青磁胴締水指》から始まり、自身が創案した「彩釉」で人間国宝となった三代徳田八十吉など十二名。赤のパートでは明治時代の細密赤絵の名工・石野竜山《赤絵龍図花瓶》、浅井一毫《赤絵金彩貝文花瓶》から、色絵の人間国宝・富本憲吉、現代の細密赤絵を代表する福島武山など十二名に加えて、北出不二雄の赤と青の作品を展示し、展示室の入口から向かって左が青、右に赤の作品という構成で、二十五作家二十七点の作品をご紹介します。それぞれの作品の「青」と「赤」の表現をお楽しみ下さい。

富本憲吉　《色絵更紗文蓋付飾壺》

第15回 バスツアー報告

木と生きる、木を活かす

―飛騨・高山の町並みと円空仏―

平成29年5月27日（土）

今年度の春の日帰りバスツアーは、岐阜県の飛騨高山地方を巡りました。古来より左官や大工のわざが伝わり、そのわざが現在も発展しつづける町の歴史と、江戸時代にこの地を訪れた円空上人の残した仏像の数々をご覧いただきました。

午前中はまず飛騨匠の文化館へ。飛騨の匠のわざである千鳥格子や木組みの構造を、パズルを用いて体験したり、実際に使われていた大工道具や左官道具を、解説を聞きながら見学したりしました。文化館の周囲には白壁土蔵街という趣深い建物が建ち並ぶ地域で、短い時間ではありましたが散策しました。

昼食をはさんで、午後一番は千光寺へ。寺宝館では副住職様のお話を聞きながら、江戸時代中期に飛騨を訪れ、千光寺を始め各地にたくさんの仏像を残した円空上人の事蹟とその見事な作品を堪能しました。

次は、全国に唯一現存する郡代・代官所である高山陣屋。加賀藩との関わりにも触れながらご説明をいただき、建物内を自由に見学。その後は三之町の賑やかな通りを、日下部民藝館まで自由散策しながら進みました。民藝館では御当主の日下部夫妻に、民家建築の見どころや民藝運動との関わりなどについてお話を伺いました。

ゆっくりと鑑賞する時間がとれなかった場所もあり、大変申し訳なく思っています。こうして無事にツアーを終えられたのも皆さまのお陰と存じます。この場を借りて心より御礼申し上げます。

千光寺寺宝館にて

7月前半の展示

前田育徳会尊経閣文庫分館

前田家 武の装いⅡ

6月1日(木)～7月9日(日)　会期中無休

文武二道を藩運営の根幹とした加賀藩歴代藩主が所用した甲冑と陣羽織の公開も、あと僅かとなりました。特に今回は前田利家の人となりを代弁する《金小札白糸素懸威胴丸具足》(重文)が展示されています。自身を荘厳するかぶき者の精神は、形を変えてその後の藩主たちに継承されています。学者大名として知られた五代藩主・綱紀が、新しい武具の開発にも力を注いでいたことも注目される事実です。甲冑の形態は、大阪の陣以後大規模な戦闘が行われなくなったことにより、簡略化されていったとの見方もありますが、今回展示している綱紀の甲冑は、そうした見方に修正を迫るものと言えます。そして、展示されている武具の美しさと素材の吟味も大きな見所です。

第5展示室

塗りもの ―うるしと素地―

6月1日(木)～7月9日(日)　会期中無休

素地に注目した今回の展示では、その素材だけでなく、かたちの違いにも目を向けました。手箱、鉢、盤などは一般的なものですが、近代に入り「展覧会」が開催されるようになると、うるしの世界にもパネルや屏風といった形態が登場します。素地と呼ぶことには違和感を持たれるかも知れませんが、今回はうるしを支える下地として、これらもあわせて展示しています。たとえば佐治正の《白猿》は、色漆の扱いに長けた作家ならではの、きわめて絵画的な作品です。あるいは一見しても、うるしとは気づかれないかもしれません。素材・かたちによって、様々に表情を変えるうるしの世界を、どうぞお楽しみください。

草花を狂的に愛した日本画家池田瑞月。金沢に生まれた近代の画家でありながら、本県においては、その多くが謎に包まれた存在でした。本展では生涯の大半を費やした《草木写生画巻》の現存する全巻を、展示替えしながらご覧いただきます。草花に対峙する一途なまなざしを感じ、その確かな描写力を味わっていただければ幸いです。また、全巻通すと三百を超える草花が描かれており、画巻の下に付した花の名前と見比べながら、楽しまれている姿もよく目にします。

※期間中巻き替えを行い、後半は次の予定で展示します。

第三期　六月二十一日(水)～六月三十日(金)
　第十～十三巻の前半・椿の巻全編
第四期　七月一日(土)～七月九日(日)
　第十～十三巻の後半・椿の巻全編

第6展示室

池田瑞月

―草花へのまなざし―

6月1日(木)～7月9日(日)　会期中無休

7月の行事予定

■土曜講座　午後1時30分～　美術館講義室　聴講無料

1日(土)	描かれた能・狂言 ―世阿弥から暁斎まで―	村上尚子
8日(土)	鷹と日本人	北澤　寛
17日(土)	日本の油絵 ―風景	二木伸一郎
29日(土)	長谷川等伯から俵屋宗達へ	村瀬博春

第7・8・9展示室
第103回
光風会展金沢展

7月5日(水)～9日(日)　会期中無休

光風会は文展、帝展、日展の中核として発展してきました。新しい時代の変化の中で芸術院会員を中心に、多彩な具象をめざす絵画部、堅実なモダニズムを追求する工芸部による活動が行われています。

今回の展示では、地元作品四十九点に基本作品と合わせて約百二十点を展示します。清新な感性と堅実なモダニズムを持つ作品の数々をぜひご覧ください。

◆主　催　一般社団法人光風会、北國新聞社

◆入場料　一　般　当日七〇〇円　前売り五〇〇円
　　大学生　当日三〇〇円　前売り二〇〇円

◆連絡先　金沢市菊川一丁目二三－四二　児島新太郎

第7展示室
第1回
第一美術協会 選抜金沢巡回展

7月12日(水)～17日(月・祝)　会期中無休

第一美術協会は、一九二九年(昭和四年)青山熊治の指導の下、「表現の自由を尊重し真の芸術を追究する」との理念をかかげ今日に至っています。第一美術協会は、絵画・彫刻・工芸の三部門から成り、毎年五月に東京新国立美術館で展覧会を開催し、今年は第八十八回目の展覧会となります。

この度石川県立美術館の協力により初めての選抜金沢展を開催する運びとなりました。地元の多くの仲間を募集するとともに、たくさんの方々のご来場をお待ちしております。

◆入場無料　◆後援　北國新聞社

◆連絡先
第一美術協会石川県事務所　山口 百合子
〒九二六－〇八一七 石川県七尾市藤橋町未部四〇番一
TEL・FAX 〇七六七－五二－七六二六

加賀友禅技術保存会は現在、十名の友禅作家が会員に認定されており、加賀友禅の正統な技術保存と後継者育成のため、石川県の無形文化財の指定を受けています。その主旨を推進するため、毎年開催しているのがこの展覧会です。

第三十二回展より公募制を採用したことで、広く一般の方も出品できるようになりました。加賀友禅における新しい感性と創造的作品の数々をご覧いただきます。

※毎日十三時三十分より作品解説があります。

◆入場料　四〇〇円(三〇〇円) 高校生以下無料
　　※(　)内は二十名以上の団体料金

◆主　催　加賀友禅技術保存会

◆連絡先　金沢市小将町八－八 加賀友禅会館内
伝統加賀友禅工芸展事務局
電話 〇七六－二二四－五五一一

第8・9展示室
第39回
伝統加賀友禅工芸展

7月12日(水)～17日(月・祝)　会期中無休

女流画家協会は、女流画家の地位向上と新人の登竜門を旗印に三岸節子、藤川栄子らの発案により第一回展(昭和二十二年)が開催されました。志は現在にも受け継がれ、会派を越え芸術を志す女流画家に美術に対する明るい展望を示し、新人を発掘育成する事が当会の役割であると考えています。昨年第七十回記念展を経て、今年第七十一回展を迎えます。金沢展は二十四年ぶり二回目の開催となり、当会選抜の美術界を代表する女流画家が会派を越え出品いたします。

◆入場無料

◆後　援　石川県教育委員会、金沢市教育委員会、
北國新聞社、テレビ金沢、北陸放送

◆連絡先　女流画家協会事務所　中村智恵美
電話・FAX　〇四四－二七二－五二〇〇

第7・8・9展示室
第71回
女流画家協会金沢展

7月20日(木)～24日(月)17時まで　会期中無休

アラカルト ただいま展示中

à la carte No.22

《金太郎》きんたろう

昭和27年(1952)　縦90.9×横116.7cm　第16回新制作協会展

脇田　和　わきた・かず

明治41年～平成17年(1908－2005)

平成の初めの頃はまだあちこちに、鯉のぼりが上がっていたのですが、近年はめっきりというか、ほとんど見ることがなくなりました。代わりに金沢の浅野川では川にたくさん流されていて、これはこれで面白いものです。色とりどりの鯉のなかで、真鯉の背中に金太郎がしがみついている図柄のものがあります。江戸時代の浮世絵にも金太郎と大きな鯉を描いたものがあります。男児の健康と立身出世の願いを込め、腕白な金太郎と鯉の滝のぼりを掛け合わせたものでしょう。

黒い腹掛けをした幼児が横断歩道を駆けて渡っています。その下には大きな緋鯉が幼児の前後に顔と尾を覗かすように描かれています。ユーモラスで不思議な作品です。この絵に作者はどんな思いを込めたのでしょう。一番のヒントはタイトルの《金太郎》。なるほど色は黒ですが、菱形の腹掛けは金太郎腹掛けです。では横断歩道にも見える、斜めに走る何本かの色の帯はなんでしょうか。これは「鯉の滝のぼり」の「滝」を象徴しているのです。滝と思えば、早い水の流れを感じるのではないでしょうか。

この作品が描かれた昭和二十年代とは違い、もう金太郎と鯉と滝とが結びつくことはあまりないかもしれませんが、本作《金太郎》は浮世絵などの絵柄を念頭に、スタイリッシュにアレンジした作品なのでした。

脇田和。東京都生まれ。祖父の代までは加賀藩士として金沢に居を構えていました。大正十二年ベルリンに留学、国立美術大学に学びます。昭和五年帰国。十一年新制作協会の結成に加わり、以後同展で活躍。戦後、ベニス・ビエンナーレなど国際展に数多く出品。平成十年文化功労者。油絵、水彩、版画で子供や鳥を主題とする洗練された抒情世界を展開しました。

次回の展覧会

平成29年8月31日(木)
～10月2日(月)

前田育徳会尊經閣文庫分館	第２展示室
前田家の名宝Ⅱ	北陸ゆかりの画聖Ⅱ

第３展示室	第４展示室	第５展示室	１Ｆ企画展示室
鴨居玲 －酔って候－	優品選	秋の優品選	これぞ暁斎 ゴールドマン コレクション 7月29日(土) ～8月27日(日)

ご利用案内

コレクション展観覧料
一　般　360円(290円)
大学生　290円(230円)
高校生以下　無料
※(　　)内は団体料金
毎月第1月曜日はコレクション展示室無料の日(7月は3日)

今月の開館時間
午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間
午前10:00～午後7:00 年中無休

7月の休館日は
10日(月)～11日(火)

広告
業界初 健康告知なしでカンタンに入れる
女性のための保険
月払400円(全年齢一律)
お手頃な保険料に関心がある方へ
無告知型女性特有疾病一時金保険
なでして保険
POINT 1 保険料は全年齢共通
20歳から79歳までの方が月払400円でお申込みできます。
POINT 2 女性特有の7つの病気を保障します。
POINT 3 保険金は一時金で最大10万円をお支払い
※無告知で入れる女性特有疾病一時金保険について（2016年11月現在さくら少短調べ）
通話無料 0037-6001-62603
受付時間 10~19時(日曜定休)
お気軽にお問合せください!
引受保険会社 さくら少額短期保険株式会社
〒171-0014
東京都豊島区池袋二丁目16番13号 光ビル
保険募集代理店 株式会社ニュートン・フィナンシャル・コンサルティング
広告有効期限:2018年1月31日　承認番号【343-HNN.1612】

石川県立美術館だより
第405号(毎月発行)
2017年7月1日発行

〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel:076(231)7580
Fax:076(224)9550
URL http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/